産土

彦島八幡宮社報
第 48 号

他力信で自力生、天恐地敬人愛の暮らしでありますように

宮司　柴田　宜夫

平成二十七年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。年頭の言葉を「他力信（たりきしん）で自力生（じりきせい）、天恐地敬人愛（てんきょうちけいじんあい）」としたためました。

他力とは、仏教で、阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願力（ほんがんりき）により、往生（おうじょう）するという教えであります。しかし、私は、生かされている今こそが他力であると考えるわけです。それは、大自然にしても、世の中のあらゆる事象や出来事、さらには日々の暮らし、自分の思うとおりに出来ることは、稀有、少ないと思います。その働きを「他力」と考えれば、その自分の思うようにならない事を嘆くより、むしろ、前向きに、他力を信じて生きていくことが大切なのではないでしょうか。まさに「他力信」であります。人間の力をはるかに超えた存在を認め、恐れ敬うなかで、日常の生活を営む、これが、「他力信」だと考えます。

では、「自力」で生活するということは、どういうことでしょうか。私は、その「他力信」の生活のなかでの心がけ、心のコントロールは、自分でできる、自力だと考えるのです。その心がけは、もちろん謙虚な心ですが、最も大切なのが、「利他」という、他人の幸福を願う、「思いやり」だと思います。他力を信じていればこそ、相手の立場に立って物事を考え、自己中心、「利己」に陥らない生活を心がける、まさに、「自力生」です。

文明十八年、西暦一、四六八年に吉田兼邦が、京都の吉田神社に願いを立てて、百首の神道の歌を詠んだ、「百首歌抄」に、「天地の　中にみちたる　草木まで　神のすがたと見つつ恐れよ」とあります。哲学者の西田幾多郎先生も、「見えるものは　見えざるものの影」とおっしゃいました。大自然の海山川、引き起こされる自然災害、草や木まですべてが神様からの恵みであり、なせる業なのですから、奇しくも尊いものと見なければなりません。見えざるものの影と恐れ、敬う、このミックスした心が、「畏敬（いけい）」、「恐（かしこ）み」であります。「自力」の心がけ、心のコントロールの柱になるのではないでしょうか。

天地の恵みを恐れ敬い、そして、今、ここにある命に感謝をして、その感謝の心を、同じ場所に住んでいる人々とつなぎ愛する、そこに、運命共同体としての地域社会が築き上げられるのではないでしょうか。まさしく、「天恐地敬人愛（てんきょうちけいじんあい）」で、「日々是好日（にちにちこれこうじつ）」でありたいものです。この一年も、皆様にとりまして、「日々是好日」、毎日毎日が、穏やかで変わりのない、平和で良い日が続きますようにお祈り申し上げます。

八幡宮からのお知らせ

どんど焼き＝一月十八日（日）執行【午前十一時頃忌火火入式】

※正月飾りは、みかん・橙（だいだい）を外して当日午前中までにご持参下さい。

執行後は来年まで受付致しませんので、予めご了承下さい。

㊟鏡餅・ビニール袋・結納品・人形・仏具・民芸品等は一切お断りいたします。

宮司プレス総集編

※平成26年下半期発行分を総集編としてお届けします。掲載紙面の都合上、中略しています。全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第九十六号（平成二十六年十月十八日）

◇宮司の柴田です。

秋風颯々（さつさつ）として、秋深まりゆく昨今でありますが、皆様大変長らく、お待たせ致しました。宮司プレス第九十六号、五ヶ月ぶりの発行です。ちなみに、宮司プレスは、毎月発行する宮司ニュースというのが、「キャッチコピー」でありましたが、いつのまにやら、月を隔（へだ）てて、遅れはじめ、季節は、春から夏、そして晩秋へと移ろい、とうとう、「季刊誌（きかんし）になりつつあります。」という弁明（べんめい）すら出来なくなりました。実は、発行が遅れていることを気にかけている私に、リスペクト（尊敬するという意味です）し、敬慕してやまない方が、「多少遅れてもいいよ。続けることが肝要だよ。」と、お言葉をかけてくださいました。少々気が楽になりすぎた、油断してしまったのではないのでしょうか。まさに、「ＣＲＩＣ（クリック）」となってしまったのです。発行が遅れているという危機（クライシス）が訪れて、なんとかしなきゃと、慌（あわ）てて月遅れの発行、応急処置をし、（レスポンス）、毎月発行への軌道（きどう）の修正がなされたと落ち着く（インプルーブメント）、しかし、また、性懲（しょうこ）りもなく油断をしてしまう（コンプリセンシー）、そして、再び、遅れるという危機が訪れるという繰り返しなのです。その頭文字を組み合わせると「ＣＲＩＣ（クリック）」、パソコンのマウスをクリック、クリックをしても修正されない状態と同じで、いつまでたっても改善されないのです。私の不徳の致すところではありますが、猛省（もうせい）させていただき、名誉挽回、週刊宮司ニュースの発行という勢いで、アニバサリーであるところの大目標の百号を目指したいと思います。

◇明治天皇様は、

「さしのぼる　朝日のごとく　さわやかに
もたまほしきは　こころなりけり」

という御製（ぎょせい、天皇陛下の詠（よ）まれた和歌のことを御製といいます）を残されています。さしのぼる朝日のようなさわやかな心持（こころもち）を、いつまでも忘れずに暮らしたいものだと詠まれています。私どもは、神様より美しい身体と心を賜っておりますが、世の中の不浄（ふじょう）なる物や出来事などに触れたり、遭遇（そうぐう）したりして、その美しさを見失ってしまいがちなのです。吉田松陰（よしだ　しょういん）先生も、「身清浄（みせいじょう）　心正直（こころしょうじき）」と日本人の心がけを説いていらっしゃいます。まさに、明治天皇さまが詠まれた「さわやかな心」ではないでしょうか。私も、「さはやかに生きる」という演題で、講演をさせていただくことがありますが、「さはやか」とは、「沢のやわらかさ、清流の光の輝き」なのだそうです。これは、今は亡き作家の藤本義一さんのエッセイに書かれていました。

◇「天正（てんしょう）」という年号、ご存知の方も多いとおもいます。織田信長が明智光秀の謀反（むほん）に斃（たお）れたのも、天正年間であります。これは、論語の「清浄は天下を正しと為す」から引用されています。元亀（げんき）という年号から改元（かいげん）されました。いよいよ、今日明日と秋季例大祭です。神様から賜った美しい肉体と心に近づかなければなりません。そのために大切なのが、「お祓（はら）い、お清（きよ）め」です。◇祝詞のなかには、「恐（かしこ）み」、さらに「白（もう）す」という言葉を幾度（いくど）となく奏上します。「恐み」は、「恐れ」と「敬い」のミックスした心です。大自然は、厳しい爪痕（つめあと）を残し尊い人の命さえも奪ってしまいます。そのような状況を目の当たりにしてはじめて、人間も大自然の一員に過ぎないことを思い知らされます。まさしく「厳父（げんぷ）」です。正しく恐れなければなりません。しかし、花鳥風月（かちょうふうげつ）、心をなごめてくれますし、豊かな恵みを与えていただけます。これこそ「慈母（じぼ）」、感謝の心で、敬わなければなりません。その忘れてならない大切な心が、「恐み」です。しかも、心の底から白状している、「心正直」に申し上げるから、「白す」なのです。もっともっと、我々は謙虚になるべきなのです。その謙虚な心である「さわやかな心」、清流の光の輝きのような心になるために必要なのが、「清め」、つまりは、論語の「清浄」ではないでしょうか。

◇自分が清浄に近づけば、自（おの）ずと家族も清まり、さらに、地域社会、やがては国家も清まり、運命共同体としての地域社会が構築できるのではないでしょうか。この二日間、「身清浄　心正直」で全身全霊（ぜんしんぜんれい）でしっかりと御奉仕申し上げ、「さわやかな心」を取り戻し、「天正」という年号の意味に近づきたいものです。皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

第九十七号（平成二十六年十一月十三日）

◇宮司の柴田です。

境内の楼門（ろうもん）下の参道の脇の紅葉が、紅の色深く染まりました。十一月七日に立冬を迎え、季節は、暦の上では、冬となりました。過日の六日、装束（しょうぞく）の衣替えを行いました。冬も駆け足でやってきますが、私の宮司プレスも全速力にしなければ、毎月発行のペースを回復できません。スパン（期間）を長くして、発行計画を策定し直しましたが、それによりますと、来年二月に、ようやく、軌道修正が見込まれます。ちなみに、毎月二号ないし三号発行しなければなりません。「うどん屋の釜（かま）」（湯（ゆう）ばっかり）にならないよう、努力を続けてまいります。

◇さて、最近、私は、「他力（たりき）」ということを意識するようになりました。もちろん、他力とは、仏教で、阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願力（ほんがんりき）により、往生（おうじょう）するという教えであります。しかし、私は、今、生かされている現在こそが他力であると考えるわけです。それは、大自然にしても、世の中のあらゆる事象（じしょう）や出来事、さらには日々の暮らし、自分の思うとおりに出来ることは、稀有（けう）、少ないと思います。その働きを「他力」と考えれば、その自分の思うようにならない事を嘆（なげ）くより、むしろ、前向きに、他力を信じて生きていくことが大切なのではないでしょうか。まさに「他力信（たりきしん）」であります。

◇中国、春秋（しゅんじゅう）戦国時代の思想家（しそうか）の老子（ろうし）は、「天網（てんもう）恢恢（かいかい）疎（そ）にして漏（も）らさず」と説きました。「恢（かい）」とは、大きくゆったりとしているさま、「疎（そ）」は、粗（あら）い様子です。つまり、「天が張りめぐらしている網の目は、いかにも大きく粗いように見えるが、何事も決してもらすものではない。」、「お天道様（おてんとうさま）は、すべてお見通し」ということです。まさに、後漢書（ごかんしょ）に書かれている、「四知（しち）の法則」、「天知る、地知る、他知る、我知る」、二人だけの秘密でも、天も知り、地も知り、我も知り、相手も知っているから、いつかは他に漏れるものであるということです。善良な行いには幸が訪れ、悪事や不正には、必ずや天罰がくだるというのは、古来よりごく自然のことであったと思います。「天知る、地知る」のように、人間の力をはるかに超えた存在を認め、恐れ敬うなかで、日常の生活を営む、これが、「他力信」だと考えます。

◇では、「自力」で生活するということは、どういうことでしょうか。私は、その「他力信」の生活のなかでの心がけ、心のコントロールは、自分でできる、自力だと考えるのです。その心がけは、もちろん、「天知る」「地知る」、謙虚な心がけですが、最も大切なのが、「利他（りた）」という、他人の幸福を願う、「思いやり」だと思います。儒教の祖である孔子は、生涯、心がけていくべき言葉は、「恕（じょ）」、「思いやり」だと述べられ、次のような言葉を残されています。「己（おのれ）の欲（ほっ）せざるところ、人に施（ほどこ）すなかれ」、自分がされたくないと思うことは、人にしてはならないということです。他力を信じていればこそ、相手の立場に立って物事を考え、自己中心、「利己（りこ）」に陥（おちい）らない生活を心がける、まさに、「自力生（じりきせい）」です。

◇文明十八年、西暦一、四六八年に吉田兼邦（よしだ　かねくに）が、京都の吉田神社に願いを立てて、百首（ひゃくしゅ）の神道（しんとう）の歌を詠（よ）んだ、「百首歌抄（ひゃくしゅかしょう）」に、「天地（あめつち）の　中にみちたる　草木まで　神のすがたと　見つつ恐れよ」とあります。哲学者の西田幾多郎先生も、「見えるものは　見えざるものの影」とおっしゃいました。大自然の海山川、引き起こされる自然災害、草や木まですべてが神様からの恵みであり、なせる業（わざ）なのですから、奇（く）しくも尊（とうと）いものと見なければなりません。見えざるものの影と恐れ、敬う、このミックスした心が、「畏敬（いけい）」、「恐（かしこ）み」で、あります。「自力」の心がけ、心のコントロールの柱になるのではないでしょうか。

◇これから、深く染まった紅の葉を潔（いさぎよ）く散らす、境内の紅葉は、来るべき冬の季節の為に、自分を犠牲にしているわけです。「利他」「恕」「思いやり」、つまり、「仁（じん）」です。しかし、それは、正しく善い行いである「義（ぎ）」です。まさに、何気ない、季節の移り変わりに、神の姿が現れている、吉田兼邦が歌に詠んだ、「かみの姿と　見つつおそれよ」なのです。「他力信で自力生」とは、「仁義」なのです。来月は、師走、気忙（きぜわ）しい季節であればこそ、「他力信で自力生」でお過ごしください。ご自愛を祈ります。

彦島八幡宮　検索

社務日誌抄

（本宮祭典厳修報告）
―平成二十六年七月～十二月―

▼文　月（七月）

二十九日　**夏越祭前夜祭・菅抜神事**
＊当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅ノ輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる古式。罪・穢れを祓い清めました。
　当宮では水無月晦日より一ヶ月の間に計三度奉製致します。

三十日　**夏越祭御神幸祭**
＊御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域を中心に陸上海上を隈なく御神幸しました。渡御は西日本有数の郷土神事です。

▼葉　月（八月）

十一～十六日　**神道家中元祭斎行**
＊上元（一月十五日）中元（七月十五日）下元（十月十五日）を先祖供養の日と定めた「みたま祭」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の一環として毎年斎行致します。

▼長　月（九月）

二十一日　**観月祭**
＊日本酒と共に名月を愛でながら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた伝統的な日本人の「こころ」に思いを馳せました。

二十三日　**秋分祭秋季祖霊祭**
＊「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」という秋分の日にちなみ、日毎ご加護をいただいている祖霊慰めの祭儀を斎行致しました。

▼神無月（十月）

十七日　**神嘗奉祝祭**
＊伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穣に感謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝し当宮におきましても厳粛に斎行され、神宮を遥拝致しました。

十八日　**秋季例大祭前夜祭**

十九日　**秋季例大祭本殿祭御神幸祭**
＊神社本庁より幣帛が奉られ、一年に一度の大御祭が斎行されました。当宮創祀者の河野通次を偲び、八五五年伝統の無形民俗文化財指定「サイ上がり神事」も厳かに執り納める事が出来ました。

▼霜　月（十一月）

三日　**明治祭**
＊戦前の明治節にあたり、四大節（紀元節、四方節、天長節、明治節）の一つです。明治天皇様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、ご皇室の更なるご繁栄を祈願致しました。

十五日　**七五三祭**
＊お子様の成長をご祭神へご奉告し、ますますの健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上げました。

二十三日　**新嘗祭**
＊天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇（てんじんちぎ）に勧め、また、自らもこれをお食しあそばされて、その年の収穫を感謝する古来より伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行われます。当宮におきましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫を神恩に感謝申し上げ、厳粛に執り行いました。

三十日　**大注連縄奉製・煤払式**
＊神域と外界とを隔てる拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。
　終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを掃き清めました。

▼師　走（十二月）

二十三日　**天長祭**
＊今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

三十一日　**大祓式**
＊私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに犯してしまった罪穢れを人形（ひとがた）に託して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を営むべく心技体を整えます。

新守札清祓式
除夜祭

夏越祭奉納グラウンドゴルフ大会
七月二十七日（日）於、江浦小グラウンド
①四重田哲治、②花屋敦治、③堀本明美、④土居茂勝、⑤児玉憲治

秋季例大祭祭奉納グラウンドゴルフ大会
十月五日（日）於、江浦小グラウンド
①河野京子、②松田隆弘、③加納裕史、④片山昭夫、⑤四重田哲治

秋季例大祭祭奉納剣道大会
十月十九日（日）於、境内
優勝選手＝森中、植田（泰）、植田（智）、藤田、小松、松尾

第三回彦島八幡宮杯争奪ソフトボール大会
十月二十六日（日）
◆一部・三部＝三菱重工業グラウンド
◇二部＝向井小グラウンド

▼一部　優　勝（アンバランス）
最優秀選手（中野 宏）

▼二部　優　勝（BETTS）
最優秀選手（内田 達夫）

▼三部　優　勝（BBクラブ）
最優秀選手（大嶋 正樹）

宮司による始球式の様子

まほろば学級 寄稿感想文

去る平成二十六年八月三日(日)、「まほろば学級」を開催致しました。

情操教育の一環として、下関市教育委員会の後援のもと開催致しましてお蔭様をもちまして第九回目を迎える事が叶いました。改めまして趣旨ご賛同賜りました関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。参加児童から寄せられました感想文を掲載させていただきます。

彦島地区の小学校を通じて、夏季休暇前にご案内状を配布しております。一日という短い時間ではありますが、氏神さまの境内、鎮守の杜で楽しい時間を過ごしてみませんか。

「最後のまほろば学級に参加して」

山中　幾斗

僕は、彦島八幡宮の「まほろば学級」に初めて参加しました。

朝、神社に着くと、車がたくさんとまっていました。知らない人ばかりだし、雨も少し降っていたので不安でしたが、同じ小学校の友達がいるのを発見してホッと安心しました。

神社でのお参りの仕方や色んな礼ぎや作法をならったり、普段近くで見ることができないおみこしや、神社の色んなものをみせてもらい勉強になりました。特に手水のやり方は、今まできちんとできてなかったけど、まほろば学級の後に、家族で旅行に行ったときに、お姉ちゃんに正しいやり方を教えてあげることができました。

初めて体験したことが二つあります。「流しそうめん」と「あんどん作り」です。そうめんは、天気がよければ竹をつなげて、長いきょり流すようだったので残念でした。むずかしいところもあったけど、自分の好きな絵を描いて作ったあんどんに火をともすのが待ち遠しかったです。

お昼からもゲームをしたり、紙しばいをみたり楽しかったけど、神様にみせる花火がバーンと大きな音をしながら上がっていくのが見れて一番おもしろかったです。

雨が降って残念な気持ちでしたけど、「五日ごとに風がふき、十日ごとに雨がふることが何でもじゅんちょうで、食べ物を作る時には大切だと教えてもらいました。台風のひどい雨や風はこまるけど、どっちとも必要なものなんだなと思いました。

神社のなかで一日中たくさん遊んで、色んなことを教えてもらってとても勉強になりいい思い出ができました。ありがとうございました。

第9回　まほろば学級　平成26年8月3日　於 彦島八幡宮

職場体験学習寄稿感想文

去る平成二十六年十一月六日(木)～七日(金)、下関市立彦島中学校の生徒六名による「職場体験学習」を開催致しました。勤労観・職業観の育成に地域一帯となり支援する校外学習の一環で実施されております。

多種多様な業種がある今日の仕事。社会人になる前の発達段階で、新たな自分を発見する手掛かりを掴むよい契機だと思います。自己の個性や適性を把握し自己理解を深めていく上で、様々な体験・経験を積み重ねることは、極めて重要であります。実際に仕事を経験し、働くことの厳しさや喜びなどを身をもって体験することを通して、コミュニケーション能力、社会的スキルを身に付け、人間関係の大切さを体得していただけたと思います。

参加生徒から寄せられました感想文を掲載させていただきます。

下関市立彦島中学校 第二学年

奥迫　楓

僕は、二日間で彦島八幡宮に職場体験学習をさせていただいて思ったことは、礼儀作法が厳しくて早寝早起きが大変だという事です。毎朝早くからの勤務は想像以上にきつかったです。

初めは清掃だけかなと思っていたけど、朝拝から始まり夕拝までは様々なスケジュールでいっぱいでした。御神輿の装飾を外したり、守札の袋詰め作業は貴重な体験でした。

二日目は、朝礼の時の本日のスケジュールとは違ったりして、一部ハプニングがあったので予定が変更になったり、どんな状況でもきちんとした対応が求められるんだなと感じました。「兼務社」「末社」といった彦島内にある無人の神社の管理も彦島八幡宮がしてることを初めて知りました。急な階段がきつかった福浦金刀比羅宮や関門海峡がきれいにみえた田の首八幡宮などへ行き新しい発見があり楽しかったです。

仕事をしている時、ちょっとふざけた仲間もいたり、ケンカもしたりしたけど、職場での過ごし方を彦島八幡宮を通して体験できたことは、自分の宝物になると思います。次のステップアップに活用し、一歩ずつ社会で活かせていけるよう、宮司さんが何度も言っていたおかげ様の心、感謝する心を忘れないようにしたいです。

最後に、為になる講話をしてくれた宮司の柴田さん、禰宜の川西さん、権禰宜の山本さん二日間お世話になりました。本当に有難うございました。

『神社・お祭りの自由画コンテスト』入賞者の発表

過日、山口県神社庁主催による『神社・お祭りの自由画コンテスト』が開催されました。県内多数の応募者の中より彦島地区の小学校より左記の方々が入賞の栄誉に輝かれましたのでご報告申し上げます。

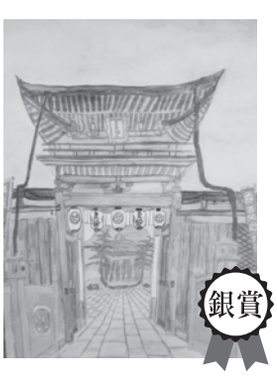
毎年、彦島地区の小学校対象に夏季休暇前、コンテスト応募のご案内を致しております。彦島地区以外の山口県内の小学生の皆様は、氏神神社(うじがみじんじゃ)や山口県神社庁（☎八三-九二二-〇五〇六）にお問い合わせ下さい。

金賞

下関市立江浦小学校四年　大谷　智久

金賞

下関市立西山小学校二年　藤田　遼人



銀賞

下関市立西山小学校五年　米山　昂我

金賞

下関市立西山小学校五年　藤田　羽菜

彦島八幡宮　検索

神宮大麻を拝受するまで

皆様のご家庭や会社には、神宮大麻は奉斎されていますか？伊勢の皇大神宮（内宮）天照大御神様の御神札の事で、神宮が直接携わり、毎年一体一体丁寧に奉製されています。

「神宮大麻」より「お伊勢さまのおふだ」と申した方が馴染み深いかもしれません。

大麻は本来「おおぬさ」と読み、「ぬさ」は神々への捧げ物を意味し、麻や木綿の事です。今日でも神社でお清めに用いられる祓具を「おおぬさ」と呼びます。そこから厳重かつ特別なお祓いを経て奉製される御神札を「たいま」と呼ぶようになったと伝承されています。

古来より伊勢の御師（神宮と全国の崇敬者との間を取り持つ神職）によって頒布されてきましたが、明治五年から神宮が直接大麻を奉製し、頒布するようになりました。これは、明治天皇様の思し召し「朝夕二皇大御神ヲ慎ミ敬ヒ拝ム為ノ大御璽トシテ神宮大麻ヲ国民全戸二漏レオツル事ナク奉斎セシメヨ」との大御心によるものでした。

その後変遷を経て、昭和二十年の終戦以降は、神宮から神社本廳（神宮を本宗とし、全国各地の神社を包括する）に委託され、全国の（氏神）神社を通じてご家庭に頒布されています。

ここでは、天下平安の祈りが込められた民族的連帯の証である神宮大麻や神宮暦に関連する奉製過程や祭典をご紹介致します。

▼奉製されるまで

神宮大麻が奉製されている神宮司廳の頒布部は、猿田彦神社近くの旧参宮街道の高台に位置し生い茂る森の中にあります。

毎朝、奉製員は出勤すると神事には不可欠な「潔斎」と呼ばれる根幹的な浄化儀礼を行い、白衣に着装を終えると両宮（皇大神宮・豊受大神宮）を遙拝し、五十数名が神宮大麻を一体一体丁寧に奉製していきます。

和紙に糊づけし、麻緒を締め、小口を丁寧に畳んでいくという心を籠めた一連の作業がそれぞれ行われます。奉製される度に随時（週一度）頒布部にある修祓所で「大麻修祓式」が神宮神職により斎行され、はじめて御神札となります。

▼御真（御神体）と御用紙（伊勢和紙）

祓串の意義がある御真の御用材は神宮林で調達され、五十鈴川畔にある神宮司廳の頒布部第二奉製所で乾燥され、長さ二十センチメートル、厚さ一ミリメートルに加工奉製されています。

御用紙は豊受大神宮に程近い大豊和紙工業㈱の製造所で、清浄を期して漉かれています。粘り強く艶が特徴的な土佐楮を原料に、地下五十メートルの地点から汲み上げた宮川（三重県随一の清流）の伏流水で煮たり、水に晒すなどの工程を経て御用紙が出来上がります。専門の熟練検査士が一日に約二万枚を検品するとされています。

▼祭典

一月上旬　**大麻暦奉製始祭**（頒布部祭場）

＊神宮大麻と暦の奉製始めの祭儀禰宜が最初の大麻に神璽を押捺する。

三月上旬　**大麻暦頒布終了祭**（皇大神宮神楽殿）

＊全国各地の崇敬者へお頒けする大麻と暦の頒布終了を奉告する祭儀。

四月中旬　**大麻用材伐始祭**（丸山祭場）

＊大麻の御用材を伐採し始めるにあたり、皇大神宮の大宮山の木々の木本に坐す神をお祭りする祭儀。

侍烏帽子に素襖姿の工匠が忌斧を用いて「伐始の儀」を奉仕する。

九月十七日　**大麻暦頒布始祭**（皇大神宮神楽殿）

＊来年の大麻・暦を全国に領布し始めるにあたり執り行う祭儀。神宮大宮司より神社本廳統理へ神宮大麻が授けられます。

十二月下旬　**大麻暦奉製終了祭**（頒布部祭場）

＊大麻・暦の奉製の終了を奉告する祭儀。

日本の総氏神さまの神宮大麻をご家庭にお祀り致しましょう
実家を離れ暮らす子供や孫のお家にも心のより所としてお祀り下さい

［写真提供：神宮司廳］

平成27年　年頭のご挨拶

下関市長　中尾友昭

新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、平成27年の新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて昨年を振り返りますと、ノーベル物理学賞の日本人3人同時受賞や、フィギュアスケート羽生選手、男子プロテニス錦織選手の活躍など、世界に日本の存在感を示す誇らしい年でした。また、一方で大雨による広島土砂災害や御嶽山の噴火など、改めて安全・安心に向けた取り組みの必要性を認識いたしました。

本市においては、昨年、JR下関駅ビル、下関市次世代育成支援拠点施設「ふくふくこども館」の完成に続いて、シネマコンプレックスがオープンし、下関駅が新たな下関の玄関口として生まれ変わりました。

新しい勝山公民館や豊北総合支所の新庁舎の完成など、市民生活に直結した施策を進めるとともに、旧下関英国領事館のリニューアルオープンなど交流人口増に向けた各種施策にも積極的に取り組み、海響館の入館者数が1000万人を突破いたしました。また新たな慣行として市の鳥ペンギンを制定し、下関らしさをアピールするとともに市民の愛着が深まるようこれから取り組んでまいります。皆様のご支援とご協力のお陰をもちまして、着実に市政運営を進めることができましたことに、心より感謝を申し上げます。

今年は、これからの10年間のまちづくりの指針となる第2次下関市総合計画がスタートします。とりわけ、最重要課題として取り組んでまいりました地域内分権において、柱となる「下関市住民自治によるまちづくりの推進に関する条例」がこの1月1日に施行され、市民による主体的な地域課題の解決や地域活性化への取り組みが本格的に動き始めるなど、まさに新たなまちづくりが始まる年であるといえます。

春には国道191号下関北バイパスが開通し、市役所本庁舎においては新館と立体駐車場が完成するなど、市民の皆様の利便性がさらに向上します。

また今年はNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の放映に加え、参加者が1万人を超え過去最大規模のコンベンションとなる「第58回日本糖尿病学会年次学術集会」、「ねんりんピックおいでませ！山口2015」が開催されるなど、全国から多くの方がお越しになります。昨年誕生しました下関満関善席をはじめとする本市が誇る食と、そしてなによりも市民の心のこもったおもてなしでお迎えし、下関の魅力を全国に発信してまいります。

人口減少、少子高齢化社会が現実のものとなる中、地方が創意工夫を活かし、それぞれの地域の特性に即した課題の解決を図り、活力を失わずいきいきと暮らせる社会の維持が求められています。

本市は県内唯一の中核市として、地域の活性化を牽引する役割を担い、産業振興や地域間の連携など多方面における役割を果たし、そして将来にわたって豊かな地域として持続していけるよう全力で取り組んでまいりますので、今後とも、本市市政への皆様の温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様にとって良き年となりますよう心から祈念申し上げ、年頭の挨拶とさせていただきます。

祭事暦（平成二十七年上半期）

月次祭

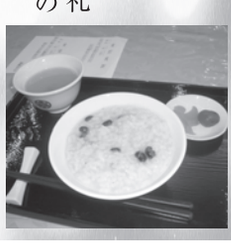
毎月1日・15日

※本殿前にて皆様方に終日「御神供米」をおわかち致しております。

朝粥会

毎月21日 午前6時30分

※誕生月の方全員に玉串拝礼をしていただきます。四季折々のお粥をご賞味下さい。



皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参拝下さい。

睦月（一月）

一日　初太鼓　歳旦祭

三日　元始祭

天皇陛下御親ら宮中三殿【賢所（かしどころ）、皇霊殿、神殿】において皇位の始源を祝し親祭あそばされます。当宮においても皇位を祝寿する祭祀が執行されます。

十五日　成人祭（月次祭）

十八日どんど焼き

＊注意＝正月飾は当日正午以降は受付致しかねます。ご持参されてもお受けできませんので予めご了承下さい。

如月（二月）

三日　節分祭追儺式

□開運福引大会

□豆まき

※豆まきは、年男女（未年廻り年）・厄年・年祝いに該当するご参拝の皆様方にも本殿にて厄除祈願祭斎行後、豆まきをご奉仕していただけます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい

〈初穂料五千円〉

十一日　紀元祭建国奉祝祭

我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げます。

十七日　祈年祭

「としごいのまつり」本年の五穀豊穣と皇室・国家の弥栄をご祈念申し上げます。

弥生（三月）

二十一日　春季祖霊祭

家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という“春分の日”を迎えるにあたり、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致します。

卯月（四月）

一日　勧学祭

この春めでたく入学される新一年生の皆様の学業成就・交通安全・無病息災を祈願する新入学奉告祭を執り行います

二十九日　昭和祭

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念致します

皐月（五月）

水無月（六月）

三十日　大祓式

彦島八幡宮　検索

平成２７年（乙未）　厄年・年祝表

（年祝）

上寿祝	大正　5年生（100歳）	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正　4年生（99歳）	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	大正15年・昭和元年生（90歳）	卒は略字で卆と書き九十と読む。
米寿祝	昭和　3年生（88歳）	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和11年生（80歳）	傘は略字で 八十 と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和14年生（77歳）	喜は草書で 七七七 と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和21年生（70歳）	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和30年生（61歳）	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

（厄年）

性　別	年　齢	前　厄	本　厄	後　厄
男	25歳	平成　4年生（24歳）さる	平成　3年生（25歳）ひつじ	平成　2年生（26歳）うま
	42歳	昭和50年生（41歳）うさぎ	昭和49年生（42歳）とら	昭和48年生（43歳）うし
	61歳	昭和31年生（60歳）さる	昭和30年生（61歳）ひつじ	昭和29年生（62歳）うま
女	19歳	平成10年生（18歳）とら	平成　9年生（19歳）うし	平成　8年生（20歳）ねずみ
	33歳	昭和59年生（32歳）ねずみ	昭和58年生（33歳）いのしし	昭和57年生（34歳）いぬ
	37歳	昭和55年生（36歳）さる	昭和54年生（37歳）ひつじ	昭和53年生（38歳）うま

（八方塞がり）

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星（方位）に囲まれた状態である八方塞がりです。不安定な年とされ、より注意をしなくてはならいない年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**三碧木星**の方が該当致します。（＊以下に表記）

大正５年、大正１４年
昭和９年、昭和１８年、昭和２７年、昭和３６年、昭和４５年、昭和５４年、昭和６３年
平成９年、平成１８年

（七五三祝）

髪置　祝	平成25年生の男女（3歳）	髪を伸ばし整え始めること。
袴着　祝	平成23年生の男子（5歳）	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解　祝	平成21年生の女子（7歳）	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭（お祓い）は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『**子安八幡**』とも称され、安産の神様としても崇められております。

腹帯をお清めされ、安産祈願祭を斎行されますことをご案内申し上げます。

各自腹帯もしくはガードルをご持参下さい。当宮の安産守護の御朱印を押印させていただきます。

古来より戌（犬）はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習が伝承されております。懐妊五ヵ月が過ぎた最初の戌の日を選ぶ地方が全国的に多く見受けられます。

＊平成二十七年上半期の戌の日を表記いたしますのでご参照下さい。

1月
10日(土)赤口
22日(木)友引

2月
3日(火)節分・友引
15日(日)友引
27日(金)先負

3月
11日(水)先負
23日(月)大安

4月
4日(土)大安
16日(木)大安
28日(火)赤口

5月
10日(日)赤口
22日(金)友引

6月
3日(水)友引
15日(月)友引
27日(土)仏滅

八幡様の知恵袋　その三十

服忌【霊懸（日がかり）】について
～忌明けまでの心得～

古来より、我々日本人は清浄を遵守し、穢れを忌む精神性から弔事が生じた場合に喪に服する事が慣習であり今日まで継承されています。しかしながら、期間に定めがなく、時代の変遷や地域性により曖昧となっている事が現況であります。年間多くの問い合わせを戴いておりますので、この機会に目安を表記致しましたのでご参照下さい。

故人との関係	期間 ※（ ）内は配偶者の場合
父母・夫妻・子	五十日（三十日）
祖父母・孫・兄弟姉妹	三十日（十日）
曾祖父母・曾孫・甥姪・叔父叔母	十日（三日）
いとこ・その他の親族	三日（一日）
特に親しい友人知己	二日

◆喪家（葬家・遺族）の留意点

①氏神神社や地域の祭祀行事への参列・奉仕を遠慮する。

②初宮詣・七五三・結婚式等の人生儀礼の参拝を遠慮する。

③服忌期間中、神棚を白紙（半紙）で覆い、神祭り（祭祀・御神札の取替）を遠慮する。**※最大五十日**

④服忌期間中、御神札や御守等の授与品拝受は遠慮する。

⑤服忌期間中に正月を迎える場合、正月飾り・年賀状の挨拶は遠慮する。新しい御神札は忌明けの小正月・旧正月・立春の何れかで奉斎する。

神前結婚式のご案内

～鎮守の杜で美しく雅やかな結婚式を～

御神縁（ごしんえん）によって結ばれる、人生における最も重要な儀式。

御本殿にて神職がお仕えし厳粛に挙行され、御結婚のご奉告を申し上げます。ご神前にて共に生きることを八幡大神さまにお誓いいただきます。

神道における最上の「産霊（むすひ）」行為を執行し、日本の伝統『和の心』を継承致しましょう。

◆神前結婚式について

本殿内ご参列の定員はご両家あわせて40名とさせていただいております（相談応）。

100名様対応の披露宴会場もあり、隣接の神社会館『瑞鳳殿（ずいほうでん）』にて挙行できます。

記念撮影の写真は、ご要望がございましたら当方で手配致します。

その他、貸衣装等婚礼に関してお問い合わせがございましたら、お気軽に社務所までご連絡下さい。

（彦島八幡宮社務所

☎083-266-0700）

◆お申込み方法

仮予約はお電話にて承ります。

*初穂料はお問い合わせ下さい。

祭典行事の都合によりご希望の日時に沿えない場合もございますので、ご確認下さい。

尚、会場の御見学は直接お越し下さい。

秋季例大祭奉納会社ご芳名

▼神供物産品

とこわか奉納会十二社

（三池屋、もずくセンター、農水フーヅ、中冷、ダイフク、美栄水産、桃歳水産、中村屋、巌流本舗、マルイチ彦島醸造工場、牡蠣小屋流王、ほんぽ）

▼彦島みそ　マルイチ彦島醸造工場

▼豆腐百丁　髙島豆腐店

▼設営　副田工務所

タツミ電工

▼ひのき材　植田木材

▼ふるまい酒（関娘）　下関酒造

シロアリ消毒散布一式奉納

彦島江の浦町五丁目　石倉集

他、氏子三名助勢

※順不同、敬称略

編集後記

本年は戦後七十年の節目を迎えます。戦争放棄の姿勢を貫き平和の状態を保持し続け今日の国家があります。その根幹は、御英霊の御霊を慰め、遺徳を偲んで来た我々日本民族の精神です。この先も揺ぎ無く相互援助、協調、英知を以て平安な日々を積み重ねていかなければなりません。

命を繋がれ、更に命を戴いていることに感謝を忘れず、この年もご加護のもとに、善き導きがありますようお祈り申し上げます。

（山本）

発行所　彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL ○八三―二六六―○七○○
FAX ○八三―二六六―五九一一
ホームページ http://www.hikoshima-guu.net
発行者　柴田宜夫
編集者　山本光徳
平成二十七年一月一日
印刷・㈱ナカハラプリンテックス